

e ラーニングを活用した連携教育の試行

後藤 康志

1. 問題意識

保健・医療・福祉・健康の現場では、医師や看護師、理学療法士、作業療法士などの専門職が緊密な連携のもとで対象者のケアにあたることが求められています。学部段階から専門職間の連携を重視した専門職育成は、連携教育とも呼ばれています。

他方、高等教育のユニバーサル化に伴い、大学においても講義による一斉指導のみで学生に力をつけることは難しくなりつつあります。このような状況を打開するための方法として注目されつつあるのが e ラーニングです。e ラーニングとはオンラインで教材の配信やテストを行う WBT(Web Based Training) やテレビ会議システムを用いて遠隔講義や演習を行うスタイルを思い浮かべがちですが、近年はこうした e ラーニングの活用だけでなく、対面の講義や研修と連携・併用したブレンデッドラーニングとしての展開が一般的となりつつあります（日本イーラーニングコンソーシアム 2006）。

こうした e ラーニングの活用は、学生側にも教員側にも利点が大きいです。学生にとっては講義で聞き逃した内容を繰り返して聞いて理解を深めることができます。レポートも義務的に書くだけでなく、他の学生の意見交流を前提とした情報発信に位置づける意義は大きいといえるでしょう（Ikuta, Gotoh & Uchiyama 2005, 後藤・生田・桑山 2007）。

教員にとっても細分化・専門化した科目間の関連を図ったり、連携して教育したりすることが可能になるというメリットがあります。教材を相互活用したり、学習の系統性を検討したりできるわけです。異なるディシプリン間での内容や方法の連携を図ることは e ラーニングでも重要な研究テーマであるとされています（Conole & Oliver 2007）。

本講では、e ラーニングを活用した連携教育の試行についてご紹介してみたいと思います。

2. 新潟医療福祉大学において連携教育を促進するための教育研究支援機能

2.1. 新潟医療福祉大学における連携教育

新潟医療福祉大学は医療技術・健康科学・社会福祉の 3 学部からなる私立大学です。将来、医療などの現場で連携して対象者に関わることができるよう連携教育に力を入れております。

2.2. 連携教育を推進するための教育研究支援機能

2.2.1. 教育支援機能

学生は講義を聴講し単位を修得することになるが、WBT などの e ラーニングを取り入れることにより、マイペースの学習や予習復習、情報発信による知識の内面化が支援できます（図 1・支援 1）。

また、専門 A と専門 B は相互に関連しているといえます。これを関連づける作業は従来、個別の講義を聴講した学生がすることになります。近接した領域であれば教員 A と教員 B が相互に連携は容易ですが、異なる専門職間の科目の連携となるとシラバスやテキストレベルで相互の講義内容を理解し連

携することは困難となります。このとき、講義内容が WBT 化されていれば、講義内容をそれぞれの教員が把握しやすくなり、学生の知識の統合化のための支援や言葉かけが可能になると考えられます（図 1・支援 2）。

2.2.2. 研究支援機能

高等教育においては専門領域における研究と講義は表裏一体のものです。専門 A を研究領域とする教員 A はその領域の講義を担当するわけです。支援 3 はその舞台裏ともいえるそれぞれの専門領域における研究を交流する場を SNS(Social Network Service)などで形成できることをいう。

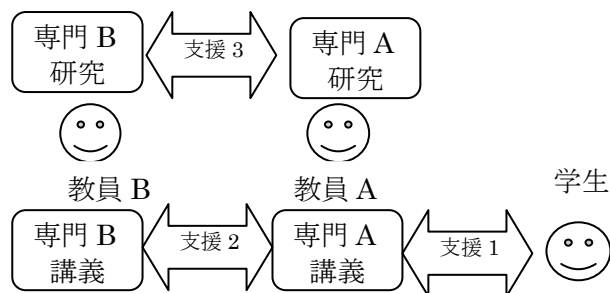


図 1. 教育研究支援機能

3. 新潟医療福祉大学における e ラーニング試行

こうした教育研究支援機能について、特に支援 1 についての取り組みを報告します。

3.1. 対象学生・科目・実施期日

対象学生は健康科学部 2 年生 105 名です。実施期日は 2008 年 2 月 9 日から 11 日までの 3 日間（集中講義）で行いました。



図 2. システムを活用した学習

3.2. e ラーニング推進による支援

LMS(Learning Management System, Moodle1.8.2)を開設し運用時のネットワーク及びシステム負荷の監視についても実施、分析しました。e ラーニング運用上にあっては、専門的に支援、分析等を担当する e ラーニング推進機構が必要です。

3.3. 授業の概要

15 コマの講義を講義（10 コマ）と演習（5 コマ）に分けたブレンデッドラーニングです。

講義では教育の本質と思想，教育制度の変遷，教育課程，教育方法，教師論，生涯学習，現代の教育課題についての講義とフォーラムを活用しました。

演習は全体を 14 の章に分け，班ごとに担当の章について次年度の学生が使えるテキストを作成するという活動を取り入れました。予め各章 40 分程度の WBT 教材を収録しておき，学生は必要に応じて復習させました。学生は e ラーニング，対面講義でのメモ，教育学に関係する図書，インターネット上の情報を収集・整理・再構成し，担当する章のテキストを作成した。同じ章を複数の班が担当するように意図的に班構成してあり，他の学生はどうテキスト化したか相互評価を行わせました。学生による WBT の自由記述の評価では，聞き逃した部分を再視聴でき，早送り・巻き戻しが容易であること，聞くだけでなく質問や討議を行いたいというものがありました。



図 3. WBT を活用した学習

4. 課題

e ラーニングは、いつでも・どこでも学べるというメリットがあります。本学健康スポーツ学科に所属する学生は遠征や合宿などで大学での講義を欠席せざるを得ないことがあり、そのような場面でも e ラーニングを有効に活用できます。

本講では、e ラーニングを活用する連携教育のデザインの概要と、その端緒を開く e ラーニング試行を述べたわけですが、今後全学的なニーズを把握しつつ、連携教育の促進を図っていくのが課題となっています。そのためにも e ラーニング推進機構のような機関を設け、全学的に受けられるシステムを構築していくことが求められています。

5. 引用文献

Conole,G,&Oliver,M(Eds)(2007) Contemporary Perspective in E-learning Research.Themes,Methods and Impact on Practice.Routledge.

後藤康志・生田孝至・桑山裕明(2007) 映像を活用した「教育方法・技術」授業の開発.第 14 回日本教育メディア学会発表論文集:128-129

Ikuta,T.,Gotoh,Y & Uchiyama,W. (2005) Development of an In-service Teacher Training System using online Structured Card Method, Proceedings of E-Learn2005:2958-2961

日本イーラーニングコンソーシアム（編）（2006）e ラーニング白書 2006/2007 年版.東京電機大学出版会

注記：本稿は、後藤ら(2008)e ラーニングを活用した連携教育促進のデザイン.日本リハビリテーション連携科学学会第 9 回大会発表論文,60-61 に一部加筆したものです。

